

張遼と部下の陳宮が呂布を迎え入れ
て反逆し、曹操の謀臣というべき
程昱や荀彧の守る三県を除いてほと
んどの地域が彼らに呼応したのであ
る。呂布は三国志随一の武勇を誇る
武將で、董卓の腹心であったがこれ

天下併有の心を抱いているものの、
知力はそれほどではありません。將
軍よ、彼の下に立つことができます
か。將軍は竜虎の勢威をもちながら、
劉邦の一武將だった韓信や彭越のよ
うなことになってよろしいのか。い

「袁紹が強力すぎて自分も不安だつ
たのだから、いわんや皆の者なら当
然だ」といったという。人心掌握の
天才である。

外為決済リスク削減を実現したイノベーション

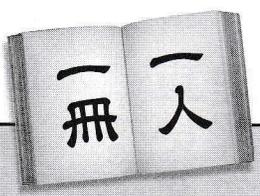
金融商品を購入または売却する際、個人が決済リスクを意識する
ことはないに等しいが、4月に入る直前に、「株式取引は実質
新年度入り」などという記事を目にすると、決済は即日ではな
った事実を再認識させられる。本書のテーマである外為の一般
なスポット取引では、決済は取引日の2営業日後だ。個人投資家
の保護により、金融機関との取引で投資家側の決済リスクは考
えにくいものの、銀行間の取引では状況は大きく異なる。外為決
済リスクは、元本リスク、巨額であること、テールリスクの3点が
特徴と著者はいう。

外為取引で、通貨の受渡しはそれぞれの通貨が発行された国の
市場において行われるというルールを知る必要がある。このため
円とドルの取引のように、それぞれの決済市場に時差がある場合
二つの受渡し間にタイムラグが生じ、一方の通貨を受け渡した
のに、もう一方の通貨を受け取れないというリスクが発生する危
険性をはらむ。事実、この「時差の存在によるリスク」は、破綻
したヘルシュタット銀行事件等で現実のものとなった。円を対価

とする外為取引が多い邦銀にとり、放置できないリスクである。
こうした外為決済リスクを削減するのに最も効果的なのが、一
方の通貨の支払いと他方の通貨の支払いをワンセットで行うP
P (Payment Versus Payment) メカニズムを採用することであ
る。PVP実現のために、中央銀行の働きかけを受け、民間銀行
グループにより一種の銀行として設立されたのが、2002年に
稼働を開始したCLS銀行だ。現在までに世界のインターバンク
外為取引高の80%強、インターバンクと対顧客取引を含めても約
60%を占めるまでに成長した。

CLS銀行での決済については、決済資金の払込・払出しのプ
ロセスである「ファンディング」と決済のプロセスである「セト
ルメント」が別々に進行する。資金の払込は支払いの差額である
「ネットベース」で行われるのに対し、セトルメントのプロセス
では取引1件ごとに「グロスベース」でPVP決済が行われる。
なぜ、一見複雑なこの仕組みを採用したのかという謎解きは、銀
行名の由来とともに本書を読んでのお楽しみにしよう。

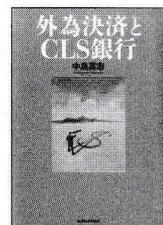
リーマンショックの発生時にCLS銀行では、リーマン・ブラ
ザースの行っていた外為取引をPVP決済により、すべて安全に
決済したことを忘れてはなるまい。CLS銀行がなければ、国際
的な金融ショックがさらに増幅していたと思うと背筋が寒くなる。
市場関係者が最近のフィンテックブームと少し距離をおいてい
るようにはみえるのは、先端的な取組みをいち早く手がけてきた自
負があるからだろう。一方、フィンテックの本命は決済まわりだ
ともいわれる。しかし、現状の決済システムを知ることなしに、
イノベーションのアイデアが生まれるはずもない。その意味で、
筆者による既刊書(共著含む)である『決済システムのすべて』
『証券決済システムのすべて』『SWIFTのすべて』に続く本
書の刊行は意義深い。フィンテックを語る前に、決済システム高
度化に賭ける著者の情熱が結実した著作をぜひ一読されたい。



評者

トムソン・ロイター・マーケットツ
社長

富田秀夫



『外為決済とCLS銀行』

中島真志 著
東洋経済新報社 (16年2月)
3,672円 / 280ページ